

戸川幸夫動物文学全集
11

講談社



戸川幸夫動物文学全集11 サークスの風ほか

昭和五十二年六月十八日 第一刷

著者 戸川幸夫

装幀者 辻村益朗

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二丁目二十一 郵便番号 一一二
電話東京(〇三)九四五一一二(大代表) 振替東京八一三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

定価 一九〇〇円

落丁本・乱丁本はおとりかえいたしません

©戸川幸夫 一九七七年 Printed in Japan

目次

サーカスの風 5

荒馬物語 155

かもしか学園 207

解説・尾崎秀樹 358

サーカスの風

黒い海

黒い色の海だった。

白い波頭が躍っている海だった。

太平洋側の明るい、のびやかな海からくらべると、日本海側の海は暗くて、荒々しい。

それだけにずっと続いた白い砂丘は美しかった。

砂丘は美しいが、年々けずりとられて後退してゆく。

「わたしらの子供のころは、いま船が通ってますね、あのあたりまでが砂浜でした。」

わたしらは夏になると毎日のようにここへきて水泳ぎをしたり、相撲をとったりしたんですが……。

こんな調子でゆくとあと十年もしたら砂浜はなくなるんじゃないでしょうかね」

観光客を案内して浜辺を訪れるハイヤーの運転手はこういってなげくのだ。

砂丘の海岸は北に伸びてどこまでも連なり、雲と水とが横の一線に溶けこむまで続いている。

海に対して汀の線をはさんで豊かな越後平野がひろがっていた。

平野には母なる大河——信濃川と阿賀野川——がゆつたりと這いくねり、やがて黒い海に注いでいる。

そんなところに新潟市があった。

砂丘の背後は濃い緑の松林だった。強い海からの風に、松たちは背が低くねじ曲がってはいたが、ほかの土地の松には見られない根強い生命力を見せていた。

松林はだらだらとしたゆるやかな勾配を見せて上っている。

そして砂地の林が上りきったところに白いコンクリートの近代的な明るい建物があった。

そこから歌声が流れていた。

潮風荒い日本海

きびしい試練にたえてよと

とどろ とどろと鳴る音の

声聞き育つ 浜のぐみ

赤い実のなる浜のぐみ……

建物はまだ造られたばかりと見えてどこもかしこも新しかった。

七月の太陽は強烈な光線を海や砂丘や松林と同じように、その白い建物にも投げかけ、まぶしい光の束をぎらぎら

らと反射させていた。

大まかにいって建物は二棟の長方形の、平行して建てられた平屋からでき上がっていた。

歌声はその一棟の、松林に面した窓から静かに流れているのだった。

子供たちの声であった。だが、その歌はハーモニーがなかった。テンボものろく、歌詞もはつきりしない。一人一人が勝手に、ばらばらに歌っている——そんな歌い方だった。

そのとき建物の正面玄関、ポーチのところに一台のタクシーがすべりこんだ。

車のドアが開くと、一人の年配の婦人が降りた。

それからこの婦人の娘と思われる二十歳ぐらいの若い婦人が降りた。

婦人たちはまずポストン・バッグと旅行鞆を下ろした。

それから娘の方が車に上半身を入れると、

「文平ちゃん、さあ」

と手をだした。

車の中にはもう一人いた。小学校五、六年ぐらいの少年だった。鼻すじの通った、眉のきりつとしまった、瞳の澄んだ利口そうな子供。ただ色が青白くて腺病質らしいひよわさが、この少年の人生が暗いものであることを示している。

少年は運転手と母親と姉とに援けられてやっと車から出

ると、姉の背に負ぶさった。

彼の腰は瘦せて、妙にいびつに曲がっていた。そして足は、萎えきって、姉が歩くにつれて力なくぶらぶらと揺れた。

「うまく入学できるといいけどね……」

母は建物の玄関口に掲げられた看板を眺めて不安げに呟いた。

看板にはこう書かれてあった。

「新潟県立肢体不自由児施設　はまぐみ学園」

母親は明るい玄関にいくぶん気圧された様子であった。

はまぐみ学園——とは書いてあっても、玄関から受ける感じは近代的な病院だった。

母親は娘と、文平と呼ばれた少年を玄関に待たせて、おずおずと受付に近寄った。

「あのう入園の手続きはこちらでよろしいんでしょうか？」

受付にはこの老婦人の娘と同じ年ごろの娘がいた。

「どちらからいらつしやいました？」

受付嬢はこの老婦人を気楽にさせようとほほえんで小首をかしげた。

「はい、佐渡の相川からまいりました。役場の御紹介がありましたら……」

母親は手提げから助役のハンコを押した書類と手紙とを

大事そうに取りだすと受付嬢の前に差し出した。

「ああ、多田文平さんですね。ええ、相川から連絡がきてます。きょうお着きになったんですか？」

「はい、ついさっき着いたばかりで、港からまっすぐにこちらにまいりました」

「このお手紙は園長先生への御紹介状ですね、あいにくと園長先生は新潟大学の方がお忙しいのできょうはお見えになる日でございませうけど……でも副園長先生がいらいっしやいますから……」

園長がいないと聞かされて母親は少しがっかりした様子だったが、

「ではなにぶんよろしくお願い申します」

とていねいに頭を下げた。

副園長は巡診中だったので母子は玄関の傍の待合室にしばらく待たされた。

廊下には曲がりくねった白線がひかれてあった。それは歩行練習に使われるものに違いない。

廊下を松葉杖をついて小学三年生ぐらいの子供がやってきた。足をひきずるようにした不自由な歩き方だったが、それでも文平はその少年がうらやましかった。

歩けるということがここでは最初の、そして最大の目標だった。

歩く格好がどうだなんてことはささいな問題に過ぎな

い。

文平は青い顔をその少年に向けた。

歩けない少年から見られるということはその少年にとつては誇らしいに違いない。

コトリ、コトリ……松葉杖の音をさせて近づいてきた少年は、文平の前で立ち停まると、

「君、こんど入るの？」
と声をかけた。

文平よりは二つか三つ年下に違いないが、少年は先輩を意識しているらしく対等なものの言い方をした。文平は黙ってうなずいた。

「ねえ、坊っちゃん」

母親がたずねた。

「お宅は新潟市？」

「ううん、長岡だよ」

「ああ長岡……いつ入園したんですか？」

「最初ンときからだよ」

「そのときは歩けたの？」

「少しね。ぼく、ここへきてから手術二回もしたんだ」

少年は自慢そうにいうとまたコトコトと音を立てて医務室の方へと歩いていった。

「しゅ……手術するの？」

文平はノドからみついたような声で聞いた。おびえているようだった。

「なんだ文平ちゃん、手術がこわいの？」

姉が冷やかすようにいった。

こわいもんかい——そう力みかえるはずの年ごろなのに文平はいじけたように伏目になった。

「大丈夫よ、あんな小さな子だって二回もしたんだもの。

女の子だってしてるんでしょ……」

姉はさらに励ますように言葉をそえた。

「やあ、お待たせしました」

副園長の志田博士だった。色白で長身だった。副園長というからもっと年配の、でっぷりと肥った紳士を勝手に頭の中にこしらえ上げていた母親は、その若さにあっけにとられたように立ち上がった。

「私が志田です。佐渡の児童相談所から連絡があったのでお待ちしていました。それで診察いたしますまえに一応了承しておいていただかねばならないことをお話しいたします」

副園長は眼鏡をキラリとつめたく光らせて、きわめて事務的にいった。情をうつしては後から辛いから決定までは機械的に処理してゆこうというようにみえた。

母親がていねいに頭をさげてなにおんよろしくお願いします、とくどくと頼むのにも副園長はあっさりうなずいて、

「ま、こちらにお入り下さい」

と先に立った。

看護婦が手押車を運んできた。文平はひとからじろじろと見られているような気がして恥ずかしかった。

いままでは家のものだけの障が、自分の不自由な足腰をいたわるように包んでくれていたが、ここではちがった。

「あの子もそうなんだ、立てないんだ」

そういった冷たさをふくんでいるように思えた。文平は診療室に運ばれる途中ずつとうつむいていた。

診療室は明るかった。部屋のすみで看護婦さんと三歳ぐらいの女の子とが遊んでいた。女の子は起きあがれないらしくマットの上に寝ころんで、看護婦さんの指をつかもうとしてキャッキッと笑っていた。うまくつかめないのがおかしいらしい。

そんなありさまを文平は手押車の上からぼんやりと眺めていた。

「お母さん、それからお姉さんですか？　まアそこにおかけ下さい」

そういつて志田副園長は文平の傍により、

「さア、ベッドに移ってズボンをとってごらん」

といった。

ズボンを脱げ、といわれても文平には出来ないことだった。家にいれば母か姉がしてくれたのだ。文平は急に悲しくなつて涙がにじんできた。

看護婦が手伝つて診療ベッドにうつむきに寝かしたと

き、文平は耐えられなくなって息をこらして泣きはじめた。

「ねえ君、君の名前は？」

志田副園長は腹ばいになった文平をのぞきこむようにしてたずねた。

「……………」

「名前は？」

「……………」

「名前をいってごらん」

「名前は多田……………」

母親が口をだしかけた。それを婦長の吉川かの子が片手でとめた。本人に答えさせるためですよ、とその目はいつている。

それでも文平は頑強に黙っていた。

「文平ちゃん、名前いうのよ、先生に……………」

姉の芳江がしかるような強い口調で言葉をそえた。

「ぶ、文平です」

文平はやっとかすかに答えた。

「文平は名前だね、姓は？」

「多田です。多田文平」

「多田文平君か……………なるほどここだね」

志田副園長はいびつに曲がった腰から、やせたもの、固くなった筋肉やすじを丹念にさわって診ていたが、

「君、自分ひとりで動きたいときは這って歩くんだね」

這って歩く——といわれることは文平にはとてもいやで、悲しい、つらいものだった。かあつと顔が赤くなると文平はそのまま黙った。

「這えるということは、治療して、努力さえすれば立って歩けるということのはじまりなんだからね。」

この学園にはね、這うことも、自分で御飯を口に入れられない子もたくさんいるんだよ」

「先生、その人たちもよくなるんですか？」

そう質問したのは母親だった。悲しそうだったその瞳には明るい希望の灯が点じられていきいきと輝きだしていた。

「よくなりますとも……………といってもそれは程度問題ですがね」

志田副園長はまくりあげたズボンを文平の腰にかけてやりながらふりむいた。

「お母さん、こちらにおいで下さい」

志田副園長は自分の事務机にもどると、その前に置かれた面接用の椅子を母親のよね子にすすめてゆつくりと喋りだした。

「もつとくわしく診察をしませんと決定はできませんが、いま拝見したところでは治療と機能訓練によってある程度の障害は克服できると思いますが、問題はすこし治療の時

期が遅すぎた憾みがあります。

もう四年生ですか？」

「いえ、五年生です。すみません」

よね子は申しわけなさそうに頭を下げた。

「五年生ですか……。お子さんはたしか……」

そういういかけて副園長はカルテ（病症録）に眼をとおした。

「ああ、三歳で発病でしたね。どうしていままでに診断をお受けにならなかったんですかねえ」

「はい、佐渡でお医者さまに診ていただきましたけど……まだこれの小さいときに……」

「それで？」

「先生は小児麻痺だからどうにもならないといわれるもので……神仏に願ったりしましたがだめでした」

「いやわかりました。過去のことを追及してもしかたがありませんからお聞きしますまい。」

で、まア治療はあきらめていられたわけですね」

「はい。……教育だけは家庭教師のかたを頼んでやらせていました。そしたら姉がこちらのことを聞いてまいりました……」

「ひとくちに小児麻痺と申しますが、いろいろありましてね、ざっと大別しますと脳をおかされたためになる脳性麻痺、脊髄をやられたのが原因の脊髄性麻痺、骨関節結核によるもの、脊椎カリエスによるもの、このほかまだありま

すが、文平君のは脊髄性麻痺なんです。このことをポリオと申しますが、ポリオの治療としては股関節屈曲、拘縮、除去手術だの各種の足部変形に対する腱の手術、骨切除の手術などがありますがね」

「骨を切りとるのでございますか？」

なんて恐ろしいことだ——よね子はまっ青になった。冷たい汗が身体じゅうにじいんとにじみでる思いだった。志田副園長は目をしばたかせて、

「骨を切りとるだの、足の筋肉をはがすだのと申しますといかにも恐ろしいことのようにお思いでしょうけどね。」

つまり骨や筋肉、腱が麻痺のために異常に変形したり、縮まってしまったり、普通でない運動をくりかえしているためによけいなところが発達したりして、正常な行動をじゃまするようになっていくのです。

ですから正常な運動をさまたげる部分を削りとり、萎縮してしまった筋肉をはがして反対側の発達した筋肉をとりつけ、訓練によって正常の動作にちかづけるようにするのです」

よね子は副園長の説明を涙をうかべて聞いていた。

「ねえ、お母さん。文平ちゃんが歩けるようになるんですもの、どんなことでもお願いしましょうよ」

姉の芳江が横からいった。よね子は大きくうなずくと立ちあがって両手を膝にそろえ、

「先生、お願い申します」

「いいねいに頭をさげた。ここで突きはなされたら絶望なんです、お願いします、援^{たす}けてください——そういった必死の願いが母の涙のなかに滲^{にじ}んでいた。

「お母さんたちや当の文平君のお気持ちはよくわかりますが、この小児麻痺^{しょうにまひ}という病気は全国でもずいぶんとありましてね、本県内だけでもここに収容できる児童数の何倍も、何十倍もあるのです。

当学園としてもその全部を収容したいのはやまやまですが施設の関係で極端に制限されているようなわけですから、治療し機能訓練によってたしかによくなると見込みのついたお子さんから収容することになっています。非情のようですが、現状ではやむをえないのです。

ですから文平君の場合も、もうすこし精密に診察をして、よいということになったら児童相談所と相談して入園を許可します」

精密な診察がひと通り終わるのにはかなりながい時間がかかった。

母と娘とは祈るような気持ちで待合室で待った。強烈だった夏の日ざしも衰^{おとろ}え柔らかなったところ、文平は若い看護婦に背負われて戻ってきた。

「文平ちゃん、どうだった」

芳江は文平の姿を見ると、立ち上がって急ぎ足で寄って

いった。

母のよね子はつづいてやってきた志田副園長に、「いかがでございましょう?」と心配げにたずねた。

「いま診断の結論を出しますから……」

志田副園長はそういいかけて腕時計をみた。

「おや、もうこんな時間か、お腹がお空きになったでしょう。食堂の方で文平君と食事をなさって下さい。その間にわかりますから……」

食堂は明るい清潔な部屋だった。三、四十人が一度に食事ができるようになっていた。子供たちの食事が終わって、これから職員の食事になるらしい。

四角な食卓をかこんで、看護婦や事務所の人たちが食べていた。

「お弁当はお持ちですか?」

文平を椅子に降ろして、看護婦がきいた。

「あのう……」

よね子は口ごもった。

「ここは売店はございませんでしょうか」

「売店はないんですのよ」

「お昼食は持ってきたんですけど、船の中で食べてしまったので……」

「いいわよ、お母さん」

芳江は母と看護婦を見て、

「宿がとつてありますから……文平ちゃんもいいわね」

「いえ、よろしかったらこの食事を召しあがってください。それにお子さんは入園と決定しますと、きょうからここへ入ることになりますからね」

セルフ・サービスというのがこの食堂のきまりだった。

食事をするひとはだれでも自分で窓口にゆき、お盆にのせられた食事をうけとる。食べ終わったらまた窓口に返しておく。

だが三人の客のためには特別な扱いがなされた。若い看護婦は三人の食事を運んできた。

「すみません。わたくしたちまでこうしていただいて……」

よね子はほんとうに恐縮した。

「園長さんでも、お客さんでも、みんなおなじものを食べることになってます。ごゆっくり……」

決して贅沢ではないが、栄養価を計算してつくられた食事だった。

「これ僕いяд。ジャガイモばかりで肉がすこしつきや入ってないんだもん」

文平は不服そうに言った。

「文平ちゃん、駄目よ。こんどここに入るようになったら共同生活するわけだから、勝手やわがままは通らないわ」

「そうだよ。文平、食べてごらん。おいしいよ」

よね子も口をそえる。

ようやく食事が終わったころ志田副園長が食堂にやってきました。

「やあ、文平君のことですが……」

「はあ」

「いま園長先生と連絡とりましてね、入園と決定しました」

「まあ、そうでございませうか？ 有難うございます。たすかります」

「で、児童相談所のほうにも連絡しておきましたから、早速入園手続きをとって下さい。」

それから文平君はきょうからここでお待ちします。

付添人は認めませんが、面会日がありますから……

まあ、一日二日はご心配でしようからおいでになっても構いませんが、なるべく早くひとりにしたほうがよろしいのです」

病室の整備ができるまですこし間があった。

副園長の許可を得て母娘は文平をおぶって海岸にでた。

学園の横に通じている砂の道をゆくと、青々とした松林にはいった。海はまだ見えなかったが、汐の香ががよく鼻をついた。

カナカナカナ……蛸がないた。松葉杖やひとり歩きのできる子供たちの姿が林のなかでちらほら見えた。

「松かさを拾ってるのかもしれないよ。文平ちゃん、行っ

てみる？」

母親はすこしでも早くみんなに慣れてほしいと、姉の芳江の背にもたれて文平に声をかけたが、文平は横に首をふった。

「海がいいのよ、お母さん、文平ちゃん小さいときから海が好きだったから……」

「そうね」

母親はふたたび歩きだした。

「文平ちゃんが赤ん坊のころね。どんなに泣き喚いてむずかっただけでも海岸に連れて行って海を見せるとびたりと泣き止んだもんね」

「でも入園できてよかったわ。文平ちゃんうれいでしょう。」

歩けるようになるのよ」

母親の喜びほど文平は喜んでいなかった。足を切つて、骨を削るというさきほどの副園長の説明で、身のすくむ思いがしているのだった。

砂道の坂はだらだらとゆるやかに上つて、松林がとだえたところで、さつと視界がひらけた。

汐風がきゆうに三人の顔をうった。すぐ目のまえに黒味をおびたあらあらしい海がひろがっていた。

そこからくだり坂だった。海岸の右手に遠く海水浴客に備えた急ごしらえの葭簀よじばりの小屋やボート置場などがあって、海水着の男女がまだ遊んでいた。

夕月が淡く浮かんでいて、そのずっと下の水平線に船がいた。

船は黒いけむりをはいて動かない。佐渡へゆくのかもしれない。

あした浜辺を さまよえば

昔のことぞ しのはるる

風の音よ 雲のさまよ

よする波も かいの色も

姉の芳江のくちびるから浜辺の歌がもれた。低くはあったが、美しくすきとおる声だった。

夕日はもう海の上に沈んでいたが海岸はまだあかるい。

「重いだろう。こゝらで腰をおろしたら……」

母のよね子はすこし小高くなつた砂丘に風呂敷をひろげた。

芳江はそこに文平をおろすとその傍にすわった。よね子もすこしはなれて腰をおろす。

砂は白く、乾いていて、足の下でさらさらと気持ちよくくずれた。

「姉さん、ハマグミってなんだい？」

文平はきいた。

「海岸に生えるグミなの。お姉さん、文平ちゃんがはまぐみ学園にゆくときめたときに植物図鑑で調べてみたのよ。」

ハマグミという名はないけどマルバグミというのがあったわ。まるみをおびたグミで赤い美しい実がなるのよ。きつとそれのことだと思ふな。ハマグミというのは方言でしょうね。きつとここにいつぱい生えてるんだと思ふうけど……」

「どうしてはまぐみ学園というのかな、ハマグミのあるところに学校があるからかい？」

「それもあるけど……それよりもハマグミという植物はね、海のとよい風に吹かれ、砂にうもれ、雨にたたかれても、まけずに芽をだし、枝をのばし、花をつけ、実をみのらすからなのよ。手足が不自由でもその困難にうちかかって、人生のびてゆこうという子供たちの気持ちをあらわしているのよ」

「ふーん」

犬たちのなき声がうしろで聞こえた。三人がふりかえると、たくさんの小さな犬をつれた奇妙な人が坂を駆けおりてくるのだった。

そのひとは頭の毛がうすくてランニングシャツに下はだぶだぶのカルサンのようなズボンをはいていた。

七 ひきの犬

チコ、ボン吉、太郎、ジョン、メリー、ポー、芳兵衛と
いうのが犬たちの名であった。

チコはスコッチテリア、ボン吉はフォックステリア、太郎は柴犬、ポーはダックスフンド、芳兵衛は四国日本犬、ジョンとメリーはスピッツだったが、それは数代以前にまったくそうだったという程度に雑種化していた。

チコはぼさぼさに毛がのびきっていて身体がかなり大きく、全身をおおっている黒毛だけがスコッチらしさを保っていた。

ボン吉は足が短くて肥っていて、フォックステリアらしいところといえばキャンキャンと金切声をあげて喚きたてることが多い。

太郎と芳兵衛の耳は半だれで、ことに太郎のシッポは短くて刷毛のようであった。

ジョンとメリーはクリーム色の毛がかなりまじっていたし、ポーはダックスフンドらしからぬ足長で、大頭にその特徴をのこしていた。

みんなちぐはぐで、ユーモラスだったが、その一びき一びきは達者な芸人（芸犬？）で、利口だった。

犬たちはわいわいとはしゃぎながらカルサンの男の足にからみあうようにして浜辺にでた。

「うわーい」

カルサンの男は浜辺にでると子供のように大声をあげ、両手をつくとくるくるツとんぼ返りをうった。

それが合図だったように犬たちはめいめいに自分たちの芸を披露した。